

総 長 挨 拶

井 村 裕 夫（京都大学）

ご紹介をいただきました井村でございます。ただいま岡田教授から大変素晴らしいイントロダクションがあり、あまり追加することはありませんが、一言ご挨拶を申し上げます。今お話がありましたように、平成6年度に高等教育教授システム開発センターが京都大学に設置され、岡田渥美教授が、初代のセンター長に就任され、また10月からは梶田勲一教授が着任されまして、このセンターがいよいよ実質的なスタートをきりました。本日このセンターの主催による第一回の「大学教育改革フォーラム」が、多数の皆様のご出席を得て開催される運びとなりましたことは、大学といたしまして大変喜びとするところであります。

本日は特に、大学問題に関しましては我が国の第一人者であります元文部大臣、国際文化会館理事長の永井道雄先生、東京大学の天野郁夫教育学部長に大変お忙しい中をはるばる東京からおいでをいただき、基調講演、それから問題提起の講演をしていただくことになりました。厚く御礼を申し上げます。また、文部省からは高等教育局の草原克豪審議官が、ご多忙の中おいでをいただき大変有り難く思っております。さらに大西昭男先生、北垣宗治先生をはじめ、お忙しい先生方にご参加をいただきまして心から感謝しています。

このセンターが設置されるに至りました経緯は、ただいま岡田教授がお話になったとおりであります。この先は、私個人のことを申し上げることをお許しいただきたいと思いますが、私は20年間医学部の教授として、神戸大学、京都大学で研究と教育に携わってきたわけですが、現場を離れて振り返ってみますと、どうしても研究第一主義で、教育に十分な注意を払ってこなかったのではないかと反省致します。例えば、医学の分野では日本医学教育学会という学会がありますけれども、私はほんの一、二回出たきりで、あまり出席をしませんでした。しかし、大学の責任者という立場に立ってみますと、京都大学のようないわゆるリサーチ・ユニバーシティでありましても、やはり研究と教育のバランスのとれた発展を目指さない限り、本当の意味のセンター・オブ・エクセレンスとは言えないのではないかと思います。

たまたま当時教育学部長であった岡田教授は、大学教育の改革の必要性を痛感され、教育学の専門の立場から色々と検討して、このセンターの構想をまとめていただきました。幸いにして、文部省の大変暖かいご理解とご支援をいただき、また大学事務当局の努力もあって、いわゆるファカルティ・ディベロップメント、あるいはスタッフ・ディベロップメント、すなわち大学教授法の改革を目的にした、日本で最初のセンターが京都大学に設置されることになりました。このことは私どもにとりまして大変嬉しいことであります。平成7年度には、教育の評価にかかわる第二の部門の設置も内定しており、いよいよセンターも整備を終えて、本格的な活動に入る時期になってきました。

ファカルティ・ディベロップメントがなぜ必要か、ということについて、これからのフォーラムの中で、いろいろと議論されるであろうと思います。私は、大学というところは未来の社会が求める人材をある程度見極め、それを基礎にした、しっかりとした教育理念を立て、その理念を実現するために教育を行っていくことが必要であろうと考えております。そのための教授法を開発し、そしてそれを普及していただくことがこのセンターの目的であります。

したがって、教育の技法もちろん大切でありますけれども、自己開発、自己形成ができるような学生を育成するためには、どうしたらいいかということもぜひ検討していただきたいと思います。

本日のシンポジウムが、このセンターが目指すものの輪郭を明らかにできるような意義あるものとなれば、大変ありがたいと思っています。簡単でございますけれども、これを持ちまして私の挨拶とさせていただきます。